ワークショップにおいてコミュニケーション不安が納得度に与える影響に関する考察

島田　壮一郎[1]・秀島　栄三[2]

[1]学生会員　名古屋工業大学大学院博士後期課程（〒466-8555 愛知県名古屋市昭和区御器所町）
E-mail: s.shimada.336@stn.nitech.ac.jp

[2]正会員　名古屋工業大学大学院教授（〒466-8555 愛知県名古屋市昭和区御器所町）
E-mail: hideshima.eizo@nitech.ac.jp

ワークショップには多様な主体が参加しており，そのような中でコミュニケーションが円滑に進むことが成功の鍵となる．本研究では参加者のコミュニケーション不安が納得度にどのような影響を与えるかを分析した．結果として，ワークショップの場において感じるコミュニケーション不安は結果に対する納得度だけでなく時間配分に対する納得度にも影響を与えることが分かった．また，少人数という状況においてコミュニケーション不安が低い参加者は時間配分の納得度が低いという結果から，時間不足で議論が物足りないと感じる参加者に対して時間内に議論を的確にまとめることが重要であると言える．

Key Words: *workshop,discussion,communication apprehension*

1.　はじめに

地域の課題を解決するために多様な住民が協働しあうことが望まれる．その一方で多様な住民が関わることによって参加者間の関係性は複雑になる．わが国ではそのような状況でワークショップを実施すると発言することを恐れたり，恥ずかしく思ったりするようなコミュニケーション不安を感じることで積極的に発言できず，主体的な参加が出来ない参加者が現われる可能性があり，十分な議論が行われずに地域としての結論を出すことがある．ワークショップではしばしば参加者のその後の行動に影響を与えることが期待される．そのためにはワークショップでの議論や結果に対して納得することが重要になる．参加者間で円滑なコミュニケーションが行われない場合には意見について議論したり，取り入れられたりする可能性が低くなる．

本研究では実験を通じてワークショップにおいて参加者がコミュニケーション不安を持つかを明らかにし，コミュニケーション不安が参加者の納得の度合いにどのように影響を与えるかを明らかにし，ワークショップにおけるコミュニケーションの働きを考察する．

2.　住民参加のワークショップの現状と課題

「参加者が自ら参加・体験して共同して何かを学びあったり創り出したりする場」であるワークショップ[1)]は一方的な講義のような形態ではなく，各参加者の主体性が重視される．また，体験することが重視され，自らで物や案を作成することが必要となり，さらに，参加者間の相互作用の中で刺激しあい，協力し合いながら学び，決定していくという特質がある．

目的を達成するためにさまざまな方法が用いられている．いずれも参加者の意識に変化を与えることが期待される．そのために，意見しやすいような場づくりが必要になる．

自治体等の行政が主催し，住民に参加を要請して行われるワークショップがある．そのような場合には，自治会長や民生委員などの自治組織の役員が参加することが多く，年齢層が高くなり，偏った意見になる可能性がある．それを避けるため大学生などに参加を求めるなどして多様な参加者の意見を集めようとする．このような場合，役員と学生とではまちに関する情報量や意識に差があり，片方が先方についていけないなどの状況になる可能性がある．そのような状況にあるとき，参加者はコミュニケーションに不安を感じる可能性がある．

3.　ワークショップにおけるコミュニケーション不安

ワークショップでは参加者が協働することが重要であ

る．人間の関わりの階層として関わりが深いものとしてコラボレーション，すなわち協働がある．その下層に対話や発表などを行うコミュニケーションがあるとされている[2]．このコミュニケーションには，言葉を交わすだけでなく議論の流れや構成を当事者に把握させる働きもあると考えれる．しかし，コミュニケーションの能力には個人差がありワークショップの参加者が必ずしも十分なレベルに到達しているとは限らない．コミュニケーション能力の低い参加者はコミュニケーションを行うことに対して不安をもつ可能性がある．

このようにワークショップには多様な主体が参加している．参加者の諸特性とその違いによって生じる課題を明らかにする研究がこれまでにいくつか見られる．

高島ら[3]はワークショップの参加者の属性と発言内容の関係を明らかにし，参加者ごとの役割について考察している．坂本ら[4]は参加者の発言量によって参加後の意識の変化を分析している．森崎ら[5]は参加者の貢献度によって司会者の関与の効果の違いを分析している．

これらはワークショップの参加者の意識や属性についての分析考察を行っているが，参加者個人のコミュニケーションについての分析は行っていない．本研究では上述した参加者が持ちうるコミュニケーション不安について分析を行う．

話している時や話すことを考えることで恐さや不安な感情を持つことがある．そのような状況についてあがりやレティセンスなどのテーマで研究されている．記述の方法や定義についてはさまざまであるが研究の内容としてはいずれも「社会的交流の対する恐れや回避，または社会的交流への参加や享受における個人の嗜好の違い」について調査したものである[6]．McCroskey[7]は従来使われてきた用語や定義を包含できるものとしてコミュニケーション不安(communication apprehension)を採用し，コミュニケーション不安は様々な研究で用いられている．

コミュニケーション不安において対象とされているものはオーラル・コミュニケーションだけでなく，歌唱や書記に対する不安についても定義に含まれており，特定の状況にのみで見られるコミュニケーション不安についても扱われるようになった．

また，コミュニケーション不安は個人が一貫して持っているものではなく，状況に依存するものであると明らかにされており，特性および状況について考慮し，以下の 4 タイプに分類されている[8]．

・特性的コミュニケーション不安

特性的コミュニケーション不安はあるコミュニケーション方法に対して，時間や場面に関わらず，一様に見られる不安の感情である．

・状況コミュニケーション不安

状況コミュニケーション不安はある特定の文脈において行われるコミュニケーションに対する不安の感情である．状況に関わらず見られる特性コミュニケーション不安とは相対する概念である．さらに，状況コミュニケーションは状況の違いによってスピーチ，会議，小グループ討論，1 対 1 の対話に分けられている．

・人物コミュニケーション不安

人物コミュニケーション不安は特定の聞き手が存在する場合においてみられる不安の感情である．人物コミュニケーション不安は個人の性格によるものではなく周囲の状況によって生じるものであるという点で特性コミュニケーション不安や状況コミュニケーション不安と異なる．

・状態コミュニケーション不安

状態コミュニケーション不安とはある特定の個人や集団とのコミュニケーションにおいて生じる不安の感情である．聴衆コミュニケーション不安とはある時間，受け手，状況の組み合わせに特有なものである点で異なる．

本研究ではコミュニケーションに対して感じている不安や本実験内で感じているコミュニケーション不安の違いによって参加者の納得の度合いに差が生じるかを明らかにしたい．そのために参加者自身が感じている不安を表す特性的コミュニケーション不安およびその場でのコミュニケーション不安を表す状態コミュニケーション不安を測定し分析を行う．

4. ワークショップ実験

ワークショップの参加者がどのようなコミュニケーション不安を持つかを測定するためにワークショップを行った．本研究では行政が計画していることに対して興味を持ち，まちづくり活動に参画するきっかけを作ることを目的としたワークショップを行った．「名古屋で私たちが出来ること」と題して名古屋市の施策に対して自らの仕事や学業，趣味などを通じてどのように関われるかを議論する．これは名古屋市に住んでいたり，通勤･通学していたりする参加者が多いため，議論しやすいテーマではあるものの，まちづくりや都市計画に対する情報や経験によって議論の内容に差が出る可能性があると考えられるのでこのテーマを採用した．

ワークショップには学生 12 名で社会人 6 名が参加し，1 グループ 4～5 人×4 グループで行う．さらに各テーブルにテーブルファシリテーターを 1 人ずつ置く．ファシリテーターは，「促進する」，「容易にする」，「支援する」，「円滑にする」という意味を持つファシリテート(facilitate)が語源である．本稿におけるファシリテーターは，議論の進行を管理する役目を担う人物を指し，またその働きをファシリテーションと呼ぶこととする．ファシリテーターの基本的なスタンスとしては，常

に中立的な立場で討論を進行し，建設的な議論になるように参加者間のコミュニケーションを支援する．

ワークショップのスケジュールを表 1 に示す．アイスブレイクでは「名古屋の好きなところ」というテーマ話し手と聞き手に分かれて対話のウォーミングアップとして行った．情報提供では「名古屋市総合計画 2023」[9]についての概要について策定に関与した学識者が説明を行った．グループワークでは「私たちにできること!!」というテーマで議論する．個人ワークと全体ワークに分けて個人ワークでは付箋に意見を書き出す．全体ワークでは書き出した付箋を説明しながら模造紙に貼る．そのあと，出た意見のなかで一番実現したいものを選択してもらい，「実現するために必要な事は？」というテーマで議論する．各グループは決まったことを発表する．

5. アンケート調査

(1) アンケートの概要

ワークショップの開始前と開始後にアンケートを行った．開始前には PRCA-24 のアンケートを，開始後には状態コミュニケーション不安尺度(以下，SCAM と呼ぶ)及び納得度についてのアンケートを行った．

表-1　ワークショップのタイムスケジュール

時　間	内　容
13:00－13:20	**受付【15 分】** ・受付（グループを伝える） ・事前アンケート(PRCA)
13:20－13:35 **開始**	**あいさつ【15 分】** ・ファシリテーターあいさつ ※ねらい，進め方，お願い，写真・音声記録のお断り
13:35－13:45	**ウォーミングアップ（アイスブレイク）【10 分】** ・ペアで話し手，聞き手に分かれ，お題について話す聞く **・お題：「名古屋の好きなところ」**
13:45－14:00	**情報提供【15 分】**
14:00－15:15	**グループワーク「めざすべきまちの姿に向けた取り組み」【75 分】** ・個人ﾜｰｸ：「めざすべきまちの姿・成果指標を達成するために，私たちができること」を考える．付せん 1 枚につき 1 事項を記入. ・施策毎に，付せん 1 枚ずつ紹介しながら場に出す．摸造紙上にのせていく． ・名古屋を良くするにあたって「一番実現させたいこと」決め，さらに「実現するために必要な事は？」を議論する． ・　発表者を決め，発表内容を確認する．
15:15－15:20	**休憩【5 分】**
15:25－15:45	**全体発表【20 分】** ・グループ発表【3 分×4 グループ→12 分】
15:45－15:55	**アンケート記入**
15:55－16:00	**あいさつ(ワークショップの背景)**

(2) PRCA-24

PRCA-24 は個人の特性的コミュニケーション不安を測定するために用いられている[8)10)]．またその下位尺度によって場面によるコミュニケーション不安についても測定できる．質問は五件法で行い，設問は 24 項目で構成されている．また，6 項目ごとにスピーチ，小グループ討論，会話，集会の 4 グループの下位項目に分かれている．全体のスコアが高いと特性的コミュニケーション不安が高く，下位尺度おいずれかが高い場合はその尺度についての状況コミュニケーション不安が高いことを示す．

(3) 状態コミュニケーション不安尺度(SCAM)

PRCA-24 において測定したコミュニケーション不安は回答者が常に持っている感情についてであるが，今回行ったワークショップにおいて参加者が感じているコミュニケーション不安について測定するために SCAM[8)]を用いた．質問は七件法で行い，設問は 20 項目で構成されている．

(4) 納得度に関するアンケート

ワークショップについて参加者が納得して参加できたかを測定するために納得度について尋ねる．質問は五件法で行い，設問は 9 項目で，結果に結果に対する納得度，自発的参加に対する納得度，時間配分に対する納得度，情報提供に対する納得度，他参加者に対する納得度と分けている．

(5) 結果の計算方法

PRCA-24 と SCAM の得点は各アンケートについて計算方法が決められている[8)]．

・PRCA-24

小グループ：18-Q1+Q2-Q3+Q4-Q5+Q6

集会：18-Q7+Q8+Q9-Q10-Q11+Q12

会話：18-Q13+Q14-Q15+Q16+Q17-Q18

スピーチ：18+Q19-Q20+Q21-Q22+Q23-Q24

全体：グループ+集会+会話+スピーチ

McCroskey の定めた基準[10)]では全体の値が 80 以上では高コミュニケーション不安であり 51 以下では低コミュニケーション不安としている．

・SCAM

手順 1：Q3+Q4+Q6+Q10+Q12+Q13+Q15+Q16+Q18+Q19

手順 2：Q1+Q2+Q5+Q7+Q8+Q9+Q11+Q14+Q17+Q20

手順 3：80 から手順 1 の値を引き，手順 2 の値を足す.

20 点から 50 点までの間は非常に低い不安度を，70 点から 90 点までは中程度の不安度を，110 点から 140 点までは非常に高い不安度をそれぞれ示している.

6. アンケート結果

(1) 参加者の特性コミュニケーション不安

PRCA-24 の結果を表 5 に示す．小グループの値の平均は 19.3，集会の平均は 16.7，会話の平均は 17.2，スピーチの平均は 15.2，合計の平均は 69.2 となった．参加者全体では下位尺度が高い参加者ではなかった.

また McCroskey の定めた基準によると，コミュニケーション不安の高い参加者は 8 名，コミュニケーション不安の低い参加者は 3 名であった.

(2) 本ワークショップでのコミュニケーション不安

状態コミュニケーション不安尺度のアンケート結果を表 6 に示す．平均は 55.2 であり参加者全体ではコミュニケーション不安は少し低いという結果が見られた．参加者個人では状態コミュニケーション不安尺度がとても低い参加者は 8 名，中程度の参加者は 4 名であった.

(3) 納得度の測定

納得度についての結果を表 7 に示す．それぞれの質問の値の平均は結果への納得度が 4.3，自分の意見に関する納得度が 7.5，時間配分に対する納得度が 11.1，情報の提供についての納得度が 7.3，他参加者に対する納得度が 8.3 であった.

7. 参加者のコミュニケーション不安と納得度の分析

(1) 分析の方針

ワークショップの参加者が持つコミュニケーション不安が参加者の納得度に与える影響を式(1)に示す重回帰式を用いて分析する．説明変数であるコミュニケーション不安は PRCA-24 で求めた特性的なコミュニケーション不安の値とその下位尺度である，小グループ討論，集会，会話，スピーチの値および状態コミュニケーション不安の値を用いる．従属変数である納得度は結果に対する納得度，自分の意見に関する納得度，時間配分に関する納得度，情報の提示に関する納得度，他参加者への納得度ごとに分析を行う.

表-2 PRCA-24 の設問

場面	質問文
小集団討論	(1)小グループの討論に参加するのが嫌いである.
	(2)小グループの討論に参加している間，たいてい落ち着いている.
	(3)小グループの討論に参加している間，緊張したり神経質になったりする.
	(4)小グループの討論に参加するのが好きである.
	(5)初対面の人と小グループで討論すると緊張したり神経質になったりする.
	(6)小グループの討論に参加している間，冷静でリラックスしている
集会	(7)集会に参加しなければならないとき，たいてい神経質になる.
	(8)集会に参加している間，冷静でリラックスしている.
	(9)集会で発言を求められるとき，とても冷静でリラックスしている
	(10)集会で意見を発表するのが怖い.
	(11)集会で話をするとき，たいてい落ち着かなくなる.
	(12)集会で質問に答えるとき，とてもリラックスしている.
会話	(13)初対面の人と会話に参加している間．とても神経質になる.
	(14)会話で意見を述べることを全く恐れていない
	(15)会話ではたいていとても緊張したり神経質になったりする
	(16)会話ではたいていとても冷静でリラックスしている.
	(17)初対面の人と会話している間，とてもリラックスしている.
	(18)会話で意見を述べるのが怖い.
スピーチ	(19)スピーチをすることを全く恐れていない.
	(20)スピーチをしている間，体の各部が緊張したり堅くなったりする.
	(21)スピーチをしている間，リラックスしている.
	(22)スピーチをしている時，思考が混乱してしまう.
	(23)スピーチを目前に控えて自信をもっていられる.
	(24)スピーチをしている間，非常に神経質になり実際に知っていることも忘れてしまう.

PRCA の得点は以下のように求められる.

小グループ：18-(1)+(2)-(3)+(4)-(5)+(6)
集　会：18-(7)+(8)+(9)-(10)-(11)+(12)
会　　話：18-(13)+(14)-(15)+(16)+(17)-(18)
ス　ピ　ー　チ：18+(19)-(20)+(21)-(22)+(23)-(24)
全　　体：小グループ＋集会＋会話＋スピーチ

表-3　状態コミュニケーション不安尺度

(1)不安を感じた.	(11)煩わしい気持ちを持った.
(2)不穏なことがあった.	(12)満足した.
(3)平穏に過ごした.	(13)安心感があった.
(4)くつろいで参加できた.	(14)動揺することがあった.
(5)窮屈に感じた.	(15)楽しんで発言できた.
(6)自信があった.	(16)幸福感を持った.
(7)恐怖心があった.	(17)落胆した.
(8)気持ちを乱された.	(18)うれしい気持ちになった.
(9)びくびくしていた.	(19)気分がよかった.
(10)落ち着いていた.	(20)不幸に思った.

SCAM の得点は以下のように求められる.

ステップ１：項目 3,4,6,10,12,13,15,16,18,19 の得点をすべて加える.

ステップ２：項目 1,2,5,7,8,9,11,14,17,20 の得点をすべて加える.

ステップ３：80 からステップ 1 で求めた値を引き，ステップ 2 で求めた値を加える.

表-4　納得度に関するアンケート

構成要件	質問文
結果に対する納得度	ワークショップの結果に納得していますか.
自発的参加に関する納得度	・自分の意見を発言する時間は十分でしたか. ・自分の意見は結果に影響を与えたと思いますか.
時間配分についての納得度	・テーマごとの時間配分は適切でしたか. ・ワークショップ全体の時間は十分でしたか.
十分な情報の提示とその理解	・提示した情報は十分に理解できましたか. ・提示した情報は議論するにあたって十分でしたか.
他参加者への納得度	・他の参加者の意見を十分理解できましたか. ・他の参加者は適切な発言を行っていましたか.

$$y_n = \beta_1 x_1 + \beta_2 x_2 + \beta_3 x_3 + \beta_4 x_4 + \beta_5 x_5 + \alpha \qquad (1)$$

ここで，y_n: 納得度の値，x_i:
各コミュニケーション不安の値，α, β_i: 係数を示す.

⑵ 分析の結果

a)　ワークショップの結果に対する納得度へのコミュニケーション不安の影響

ワークショップの結果に対する納得度を従属変数にしたときの分析結果を表 8 に示す．表 8 より状態コミュニケーション不安の値において統計的な有意性が認められた．その偏回帰係数は-0.0213 であり，状態コミュニケーション不安が高いと，結果に対する納得度が低いことを示している.

b)　時間配分に対する納得度へのコミュニケーション不安の影響

ワークショップにおける時間配分に対する納得度を従属変数にしたときの分析結果を表 9 に示す．表 9 より小グループ，スピーチにおける場面コミュニケーション不安の値と状態コミュニケーション不安の値において統計的な有意性が認められた．小グループの項の偏回帰係数は 0.4811 であり，小グループにおけるコミュニケーション不安が高いと時間配分への納得度も高くなることを

表-5　PRCA-24 の結果

	小グループ	集会	会話	スピーチ	全体
平均	19.3	16.7	17.2	15.9	69.2
SD	5.5	6.5	6.7	7.7	25.3

(n=18)

表-6　状態コミュニケーション不安尺度の結果

変　数	状態コミュニケーション
平均	55.2
SD	24.1

(n=18)

表 7　納得度についてのアンケート

変数	納得度合計 (n=17)	結果に対する納得度 (n=18)	自発的参加に対する納得度 (n=18)	時間配分に対する納得度 (n=18)	情報の提示に対する納得度 (n=17)	他参加者への納得度 (n=17)
平均	39.5	4.3	7.5	11.1	7.7	8.8
SD	5.4	0.6	1.8	2.6	1.9	1.1

表-8　結果に対する納得度とコミュニケーション不安の分析

			偏回帰係数の有意性の検定			* : P<0.05
変　数	偏回帰係数	標準誤差	F 値	t 値	P 値	** : P<0.01
小グループ	-0.0030	0.0598	0.0026	-0.0506	0.9605	
集会	-0.0053	0.0678	0.0062	-0.0787	0.9386	
会話	-0.0027	0.0542	0.0026	-0.0507	0.9604	
スピーチ	-0.0227	0.0458	0.2445	-0.4945	0.6299	
状態コミュニケーション不安	-0.0213	0.0085	6.2378	-2.4976	0.0280	*
定数項	6.0053	0.9403	40.7883	6.3866	P < 0.001	**

(n=17)

表-9　時間配分に対する納得度とコミュニケーション不安の分析

			偏回帰係数の有意性の検定			* : P<0.05
変　数	偏回帰係数	標準誤差	F 値	t 値	P 値	** : P<0.01
小グループ	0.4811	0.1826	6.9380	2.6340	0.0232	*
集会	0.1419	0.2013	0.4966	0.7047	0.4957	
会話	-0.1948	0.1609	1.4663	-1.2109	0.2513	
スピーチ	-0.3674	0.1362	7.2729	-2.6968	0.0208	*
状態コミュニケーション不安	-0.1005	0.0254	15.7022	-3.9626	0.0022	**
定数項	14.6599	2.8284	26.8652	5.1832	P < 0.001	**

(n=17)

表-10　納得度の合計とコミュニケーション不安の分析

			偏回帰係数の有意性の検定			* : P<0.05
変　数	偏回帰係数	標準誤差	F 値	t 値	P　値	** : P<0.01
小グループ	0.5439	0.5217	1.0868	1.0425	0.3196	
集会	0.2569	0.5751	0.1996	0.4468	0.6637	
会話	-0.5246	0.4596	1.3032	-1.1416	0.2779	
スピーチ	-0.3701	0.3891	0.9045	-0.9510	0.3620	
状態コミュニケーション不安	-0.2334	0.0724	10.3829	-3.2223	0.0081	**
定数項	52.8558	8.0793	42.7997	6.5421	P < 0.001	**

(n=17)

示している．スピーチの項の偏回帰係数は-0.3674，状態コミュニケーション不安の項の偏回帰係数は-0.1005 であり，スピーチにおける場面コミュニケーション不安や状態コミュニケーション不安が高いと時間配分に対する納得度が低いと示している．

c)　納得度の合計値へのコミュニケーション不安の影響

納得度の合計値を従属変数にしたときの分析結果を表

10 に示す．表 10 より状態コミュニケーション不安の値において統計的な有意性が認められた．その偏回帰係数は-0.2334 であり，状態コミュニケーション不安が高いと納得度の合計値が低いことを示している．

8. ワークショップでのコミュニケーションの影響

参加者のコミュニケーション不安が納得度に与える影響からワークショップにおけるコミュニケーションの影響について考察する．

状態コミュニケーション不安はワークショップの結果に対する納得度，時間配分に対する納得度，納得度の合計値と負の影響があることからワークショップにおいてコミュニケーションが行いやすい参加者は意見を言いやすくなりワークショップの結果が納得できるものになると考えられる．またコミュニケーションを行いやすいと時間配分を考慮して議論を行うことが出来るのではないかと考えられる．

小グループのコミュニケーション不安は時間配分に対する納得度と正の影響を与えることから小グループでのコミュニケーション不安が低い参加者はグループワークにおいてコミュニケーションに積極的になることで時間に関して物足りなさを感じていると考えられる．そのため，ファシリテーターはグループワークの議論を時間内に的確にまとめる能力が求められる．

9. おわりに

本研究ではワークショップにおける参加者のコミュニケーション不安がワークショップの納得度に与える影響を分析することでワークショップでのコミュニケーションの働きについて考察した．分析の結果，状態コミュニケーション不安を小さくすることでワークショップの結果に対する納得度や時間配分というワークショップの方法に対する納得度についても高くなることがわかった．

また，小グループでの場面コミュニケーション不安の大きさと時間配分の納得度との間に正の関係が見られ，コミュニケーション不安が低いことで生じる課題が生まれる可能性があることから，ファシリテーターは議論をできるだけ時間内にまとめることが望ましいと言える．

ワークショップにおいてコミュニケーションが行いやすい場であることで時間配分に対する納得度も高くなることから限られたスケジュールのワークショップであってもコミュニケーションをしっかり行うことで納得度を高めることが出来ると考えられる．また，小グループでのコミュニケーション不安が低い参加者であっても時間配分についての納得度が低いことがあり議論が得意な参加者がいる場合でもファシリテーターが議論を俯瞰してまとめる能力が必要である．

謝辞：本研究は日本計画行政学会中部支部の研究助成を受けて行った研究成果の一部である．ここに記して謝辞とする．

参考文献

1) 中野民夫：ワークショップ-新しい学びと創造の場-,岩波新書, 2001.
2) 松尾太加志：コミュニケーションの心理学, ナカニシヤ.,1999.
3) 高島太郎，中島淳司，山田宏之：ワークショップにおける参加者の属性と発言内容の関係, 環境情報科学論文集(第 23 回環境情報科学学術研究論文発表会), Vol. 23, pp. 407–412, 2009.
4) 坂本淳，鶴田佳子：ワークショップ参加者の発言量と参加後の 意識に関する調査分析－公園再整備ワークショップを事例として－, 土木学会論文集F5（土木技術者実践）, Vol. 71, No. 2, pp. 33–41, 2015.
5) 森崎孔太，塚井誠人，難波雄二，桑野将司：司会者の関与が討議参加者の納得に及ぼす影響, 土木学会論文集D3(土木計画学), Vol. 70, No. 1, pp. 28–43, 2014.
6) 坂本正裕，チャールズプリブル：コミュニケーション回避研究の歴史と現状, 心理学研究, Vol. 68, No. 6, pp. 491–507, 1998.
7) J. C. McCroskey：Oral Communication Apprehension: A Summary of Recent Theory and Research, Human Communication Research, Vol. 4, No. 1, pp. 78–96, 1977.
8) 近藤真治，ヤンインリン：コミュニケーション不安の形成と治療,ナカニシヤ出版, 1996.
9) 名古屋市総合計画2023の策定に向けた取り組み. [Online]. Available: http://www.city.nagoya.jp/shisei/category/66-9-3-0-0-0-0-0-0-0.html. [Accessed: 07-Mar-2020].
10) J. C. McCroskey：Self-report measurements, Avoiding communication: Shyness, reticence, and communication apprehension, pp. 81–94, 1984.

（2020. 7. 1 受付）

EXAMINATION Of THE EFFECT OF COMMUNICATION ANXIETY ON SONATISFACTION IN A WORKSHOP

Soichiro SHIMADA and Eizo HIDESHIMA

It is necessary to communicate smoothly for the proper result of the workshop which various participants take part in. We clarified the anxiety about communication in the workshop and analyzed how it affected the participant's conviction. The results showed that participants who felt anxiety about state communication affected not only the results of workshop but also their satisfaction with time allocation. Participants who had low situational communication in the small group were less convinced of the time allocation.